

地域や人のために、できることを続けていく――

空き缶を回収し、地元の福祉施設などへ車いすを寄贈する活動続ける東さん。平成3年からこれまでに寄贈した車いすは、今年で23台となりました。

【誰かの役に立ちたい】

車いす寄贈の活動は約30年前、東さんの母、カツエさんの思いがきっかけで始まりました。

「ごみの分別が始まった当時のことです。母は、地区から出される資源ごみを、人のために役立てたいと思い立ったそうです。近所の20軒ほどに声掛けし、回収を始めました。私たち夫婦も母を手伝っていたのですが、正直、最初は少し恥ずかしさを感じました。空き缶を回収するときは、パンパンに詰まったビニール袋を台車に乗せて近所を回る



ので、当時はその様子が見られることもあったからです。母は、子

どもたちから「カンカンおばさん」と呼ばれたくらい。それでも一緒に続けたのは、使命感を持ち一生懸命に、何よりも楽しそうに取り組む母の姿を見たからです。活動は、きつと母の生きがいにもなっ

7年前でした。「母が高齢となり活動を退いた後は、夫婦で介護をしながら空き缶の回収を続けてきました。しかし、母が亡くなると、自然に活動中止の話が出ました。でも『せっかくだ



空き缶を回収し車いすの寄贈を行う

ひがし きよこ
東喜代子さん(横井三丁目)

ていたと思います」

【周囲の応援が継続の糧】

長く続く活動ですが、一度だけ途切れそうになったことがあるそうです。それは、東さんの母親が亡くなった

い活動なんだから、もったいないよ』と周りから声を掛けてもらったことが、続ける糧になりました。元々、助けてくれる皆さんのおかげで、続けてこられたんですね。今では、私が参加する『トランポ

ウォーク スタジオフレンズ教室』や六合のお菓子作り教室の仲間も、協力してくれるようになりました」

【マイペースが笑顔のもと】

車いす1台の寄贈に、必要な空き缶の量は約1t。朝夕、暑い日も寒い日も回収を行います。その活動は、来年で30年目を迎えます。

「活動に縛りができたり、やらなければいけないという制約が生まれてしまうと、続けるのは難しくなってしまう。好きなことを楽しみながら、空いているときに自分のペースでやる。これが、無理せず長く続けるために大切なことだと考えています。車いすを受け取った人が、使って喜んでくれる姿が目に見えることが、一番のモチベーションです。好きなことをやれて、充実して過ごせている。今が青春かもしれないですね」

足腰が丈夫なうちは、できる限り続けていたいと、東さん夫婦は話しているそうです。自然体で楽しみながら続けるその周りには、協力の輪が広がっています。



福祉施設に車いすの寄贈を行う東さん(左奥)

Shimadajin File #104

島田
Story 人